

須川遺跡 第3次発掘調査報告書

—集合住宅建設工事に伴う発掘調査—

2015

彦根市教育委員会

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、民間の集合住宅建設工事に伴い、平成25年10月11日から平成25年11月22日にかけて実施した、須川遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成26年6月10日から平成27年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市西今町字下出688-1、688-2に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。
 - 平成25年度（現地調査）
 - 教育長：前川 恒廣
 - 文化財部長：入江明生
 - 課長補佐：久保達彦
 - 史跡整備係長：北川恭子
 - 主 査：深谷 覚
 - 副主査：三尾次郎
 - 主 任：林 昭男
 - 主 任：下高大輔
 - 臨時職員：佃 昌幸
 - 文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄
 - 文化財係長：木戸洋平
 - 主 査：池田隼人
 - 主 任：森下雅子
 - 主 任：戸塚洋輔
 - 技 師：田中良輔
 - 平成26年度（整理調査）
 - 教育長：前川 恒廣
 - 文化財部長：長谷川 隆司
 - 文化財課長：久保達彦
 - 課長補佐（兼文化財係長）：木戸洋平
 - 主 査：深谷 覚
 - 主 査：三尾次郎
 - 副主査：林 昭男
 - 主 任：下高大輔
 - 臨時職員：沖田陽一
 - 文化財部次長：西山 武
 - 史跡整備係長：北川恭子
 - 主 査：池田隼人
 - 副主査：森下雅子
 - 副主査：戸塚洋輔
 - 主 任：田中良輔
 - 臨時職員：堀田佳典
4. 現地調査と整理調査は田中が担当し、以下の諸氏が参加した。
 - 現地調査：久木正弘 平田清司 森谷義男（作業員）
大西 遼 北森 光 荘林 純（滋賀県立大学学生）
佃 昌幸（臨時職員）
 - 整理調査：沖田陽一 堀田佳典（臨時職員）
5. 本書で使用した遺構実測図は、佃 昌幸、北森 光、荘林 純、田中が作成し、遺物実測図については沖田陽一、堀田佳典、田中が作成し、遺構・遺物の写真撮影は田中が行った。
6. 本書の執筆及び編集は、田中良輔が行った。
7. 本書で使用した方位は平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

目 次

例言

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	遺構と遺物	2
IV	調査の成果	8

写真図版

図版

1	1	調査区全景（南から）
	2	掘立柱建物 SB01・02全景（南から）
2	1	井戸 SE01完掘状況（南から）
	2	土坑 SK01完掘・遺物出土状況（西から）
3	1	溝 SD01土層断面 B-B'（北西から）
	2	溝 SD02土層断面 B-B'（北西から）
4	1	溝 SD03土層断面 E-E'（南西から）
	2	溝 SD01・02・03土層断面 D-D'（南西から）
5	1	出土遺物
	2	出土遺物
6	1	出土遺物
	2	出土遺物
7	1	出土遺物
	2	出土遺物
8	1	出土遺物
	2	出土遺物
9	1	出土遺物
	2	出土遺物

I はじめに

本書は、集合住宅建設工事に伴って実施した、須川遺跡（彦根市西今町地先所在）の発掘調査成果をまとめたものである。今回の発掘調査に先立ち、平成25年9月13日に開発面積426.18㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ4箇所を設定して試掘調査を行ったところ、全てのトレンチにおいて遺構及び遺物を確認した。

このため、開発行為に伴い影響を受けることとなる建物部分、約130.42㎡を調査対象区域として平成25年10月11日～同年11月22日の期間において、本発掘調査を実施し、その後、平成26年6月～平成27年3月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

II 位置と環境

[地理的環境]

須川遺跡は、彦根市北部の西今町に所在する遺跡であり、犬上川の右岸に位置している。遺跡の南方に流れる犬上川は、彦根市東方に位置する霊仙山系を発して西方の琵琶湖へと注いでおり、その中流域においては、堆積作用による広大な扇状地が形成されている。

須川遺跡の所在する西今町周辺については、この扇状地の扇端部にあたることから複数の湧水地が存在しており、遺跡東側に位置する「十王村の水」は、環境省の名水百選にも選定されている。そこから供給される水は、かつての西今村の集落内を流れ、周囲の田畑を潤し

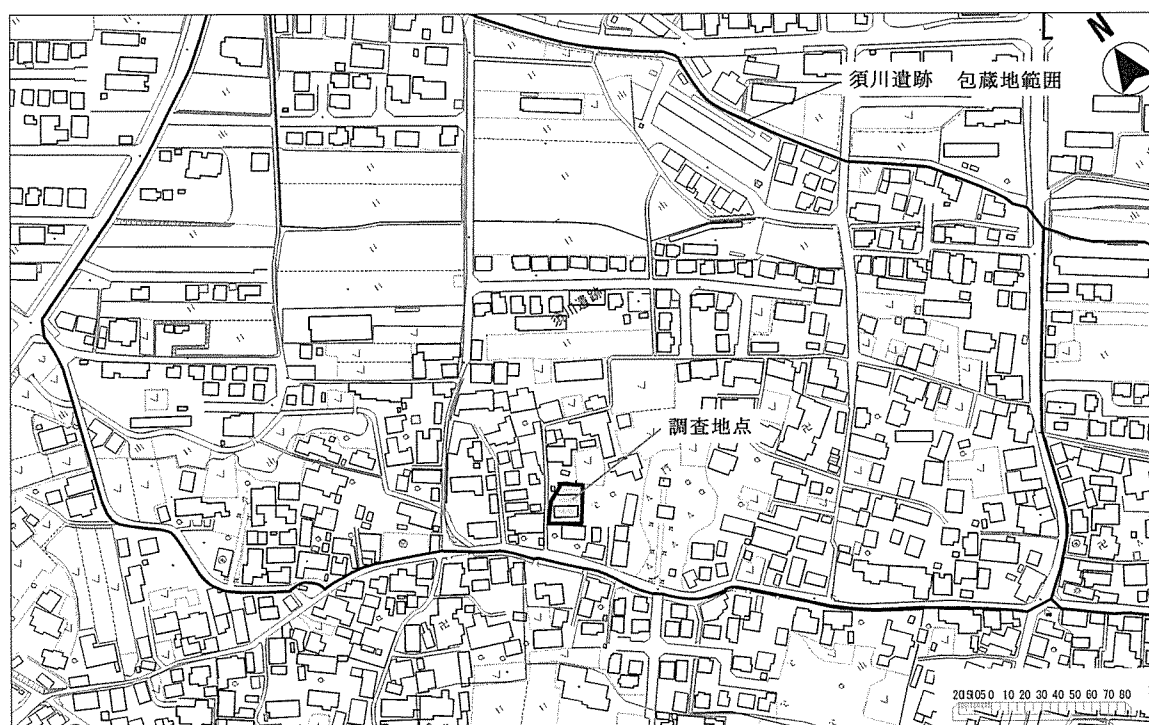


図1 調査区位置図

ている。また、この地域には犬上川やその支流の旧流路によって形成されたと考えられる自然堤防が散在しており、須川遺跡についても、こうした自然堤防の上に立地している。

今回の調査地点は旧西今村の集落の中でも、中心部に近い場所に位置しており、周辺部に比べて、やや標高の高い地点となっている。この地点一帯は、黄褐色土からなる安定した地盤を地山層としているが、一部においては、河川由来と考えられる砂礫層の堆積も見られる。

[歴史的環境]

須川遺跡は、平成24年度に行われた2件の個人住宅建設工事に伴う本発掘調査によって、少しずつ、その実態が明らかになってきた遺跡である。

平成24年度に実施された須川遺跡1次発掘調査においては、古墳時代後期（6世紀前半）頃の竪穴建物、8世紀頃の掘立柱建物、15世紀頃の土坑などが検出されている。また、同年に行われた2次調査においては、7世紀後半頃の土坑や、11世紀後半頃の掘立柱建物など、多数の遺構が検出されており、これまでのところ、須川遺跡は古墳時代後期から中世後期にかけての時期の複合遺跡であることが明らかとなっている。

こうした状況は、須川遺跡に隣接している西今遺跡において実施した、西今遺跡1次発掘調査においても似通った内容の遺構が確認されており、同地周辺の自然堤防上には、古墳時代後期以降、次第に集落が形成されていき、以降は古代、中世、近世、近現代と、継続的に土地の利用が行われてきた様子が分かってきている。

今回の発掘調査地点は、須川遺跡2次発掘調査の調査地点の西側に近接していることから、遺構が濃密に分布する、2次調査と同様の状況が想定される一方で、既知の情報を補足する、新たな知見を得ることができるものと期待された。

Ⅲ 遺構と遺物

基本層序

調査地点においては、表土層である暗褐色土層および褐色土層が約40～60cmあり、その下部において、地山層を確認した。

この地山層は、やや砂質を含む黄褐色土層および砂礫層によって形成されていた。今回検出した遺構は、いずれもこの地山層の上面から掘り込まれており、この面において遺構検出作業を行ったところ、古墳時代から古代、中世に至る各時期の遺構を検出した。

検出遺構

発掘作業は、地表面から約40～60cm余の表土を除去したのち、地山層上面において遺構の検出作業を行った。その結果、掘立柱建物2棟、溝3条、井戸1基、土坑1基、柵列2条、小穴群などの遺構を検出した。以下、各遺構について詳述する。

掘立柱建物



図2 遺構配置図

SB01 (図3)

SB01は、長軸約6m×短軸約4m(3間×2間)を測る掘立柱建物である。その主軸は、正南北軸に対して約37°西傾する方位を示しており、概ね現代の街区の主軸に一致する。

このSB01を構成する柱穴の一部は、後述するSB02を構成する柱穴に対して切り込む状況が確認されることから、2棟の先後関係は、SB02の廃絶後、SB01構築の順となる。

SB02 (図4)

SB02は、長軸約6m×短軸約3.8m(3間×2間)を測る掘立柱建物であり、その主軸は正南北に対し約25°西に傾く。SB02を構成するピットの一部は、SB01を構成するピットに切られることから、SB01に先行する建物であることが理解される。

溝

SD01 (図2、図4)

SD01は、概ね上幅約20~60cm、底部幅約20~50cmを測り、深さは約15~25cmを測る。断面は逆台形状を呈し、溝の主軸は正南北に対し約36°ほど西に傾く。調査区の北西部において、約90°南西方向へ屈曲しており、SB01の位置する側の屋敷地を区切る区画溝として機能していたものと考えられる。SE01、SD02、SD03の各遺構を切る。

SD02 (図2、図4)

SD02は、概ね上幅約130cm、底部幅約110cmを測り、深さは約15~27cmを測る。断面は浅い逆台形状を呈し、溝の主軸は正南北に対し約36°西に振っている。調査区西側で約90°屈曲するが、南側へ延びる先端部は、江戸期のかく乱によって切られているため、全体の状況は不明な部分が多い。このほかの切り合い関係としては、SD03を切り、SD01に切られる。

SD03 (図2、図4)

SD03は、概ね上幅約130cm、底部幅約90cmを測り、深さは約35cmを測る。断面は逆台形状を呈し、溝の主軸は正南北に対し約36度ほど東傾する。溝の全体像は不明であるが、調査区南西付近で緩やかに屈曲し、方位を南東方向に変えている。

井戸

SE01 (図3)

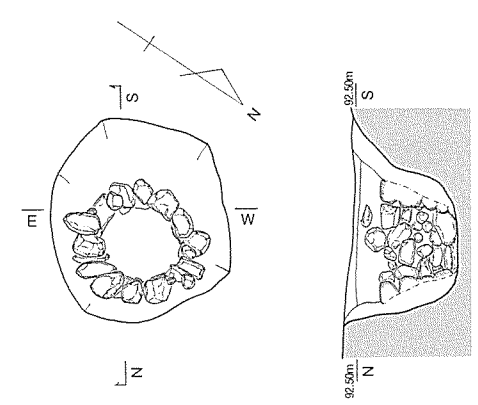
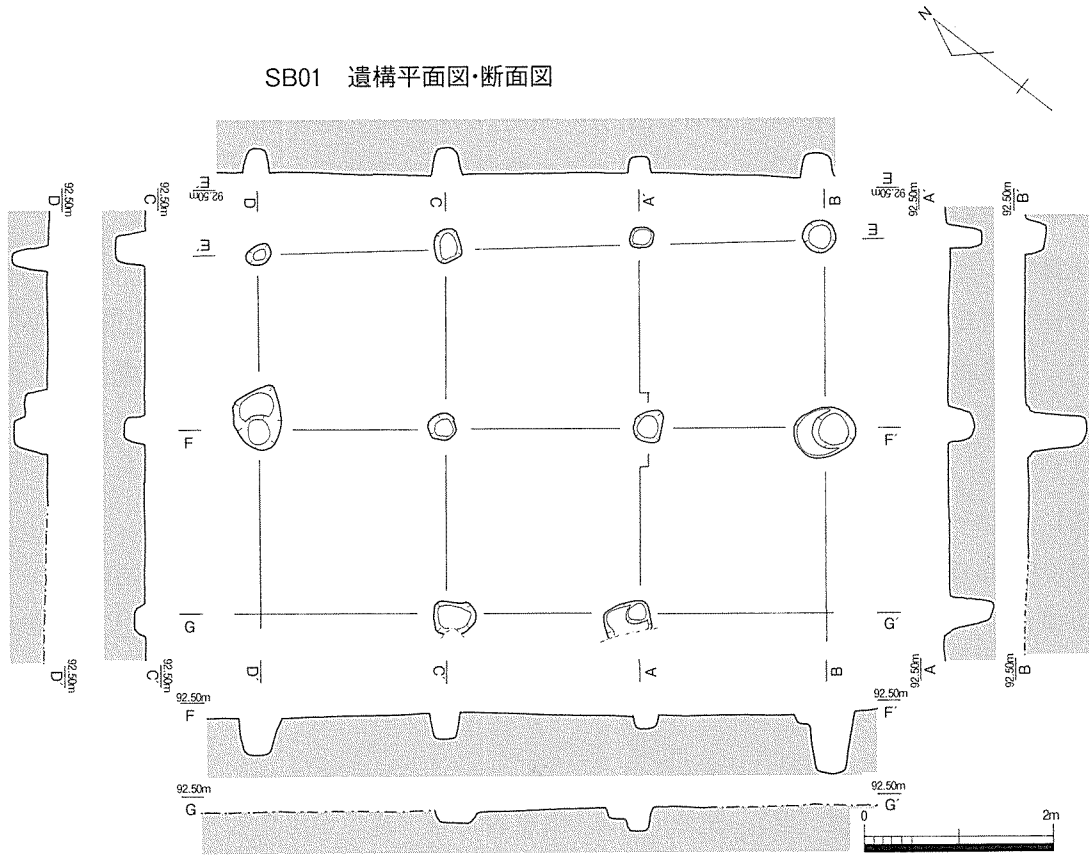
SE01は平面不整円形を呈し、掘方部分で長軸約1.6m×短軸約1.4m、石積み部分の内側では、長軸・短軸ともに長さ約60cm、深さは遺構検出面-約90cmを測る。その構築にあたっては、長楕円形を呈する人頭大の円礫を主要な石材として使用し、これを下部においては縦置きに近い斜度を持って並べ立て、上部においては井戸の外側に控えをとる形で、放射状に横置きに設置していた。また、この最下層には砂層が露出しており、現在も豊富な水の湧出が見られた。

土坑

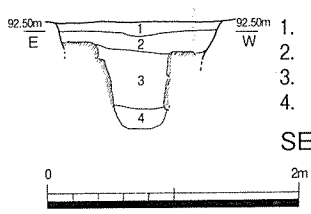
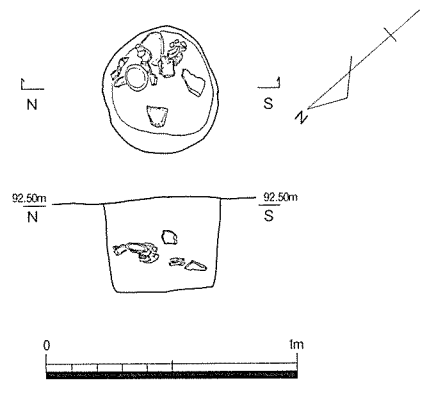
SK01 (図3)

SK01は平面不整円形を呈する土坑である。長軸約100cm、短軸約90cm、深さ約35cmを測り、内部からは緑釉陶器、灰釉陶器、土師皿、須恵器等が一括して出土した。用途としては、廃棄もしくは何ら

SB01 遺構平面図・断面図



SK01 遺構平面図・立面図



1. 褐灰色土 (10YR4/1)
2. 褐灰色混砂粘質土 (10YR5/1)
3. 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2)
4. 黄灰色混砂弱粘質土 (2.5Y5/1)

SE01 遺構平面図・立面図
土層断面図

図 3

かの祭祀行為に伴って構築された遺構であると考えられる。切り合い関係としては、SD03を切る。

柵列

SA01 (図2)

SA01は、構築時期は不明ながら、SB01やSD01と同様の主軸を指向することから、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。また、溝と柵列とは直接的には切り合わない配置となっていることから、両者が併存していた可能性も考えられる。

出土遺物

今回の調査地点においては、古墳時代、古代、中世と各時期にわたる遺物が出土している。また、遺構面採集資料としてではあるが、円筒埴輪片など、須川遺跡の性格を考えるうえで重要な遺物も出土している。以下、各遺構からの出土遺物について詳細を記述する。

溝

SD01 (図5-1、12)

SD01からは白磁小皿(1)、信楽焼播鉢(12)が出土した。これらの出土遺物のうち、白磁小皿については15世紀後半～16世紀前半、信楽焼播鉢については、概ね15世紀末から16世紀前半にかけての遺物と考えられ、遺構の時期としては、概ね16世紀前半を中心とした時期の遺構であると考えられる。

SD02 (図5-2、3、8)

SD02からは土師器皿(2)、瓦片(3)、須恵器坏身(8)が出土した。これらのうち、土師器皿については8世紀代、須恵器坏身については6世紀末～7世紀初頭頃のものと考えられることから、遺構の時期としては、8世紀頃のものと考えられる。

SD03 (図5-4・5・9・10、図7-31・32・37)

SD03からは土師器壺口縁部(4)、土師器甕口縁部(9・10)、土師器甕底部片(5)、高坏脚部(31・32)、碗型滓(37)が出土した。これら遺物については、庄内平行期から布留式期まで時期幅を持つが、遺構の時期としては、概ね古墳時代前期の終わり、布留式の新段階に位置づけられるものと考えられる。

井戸

SE01 (図5-11)

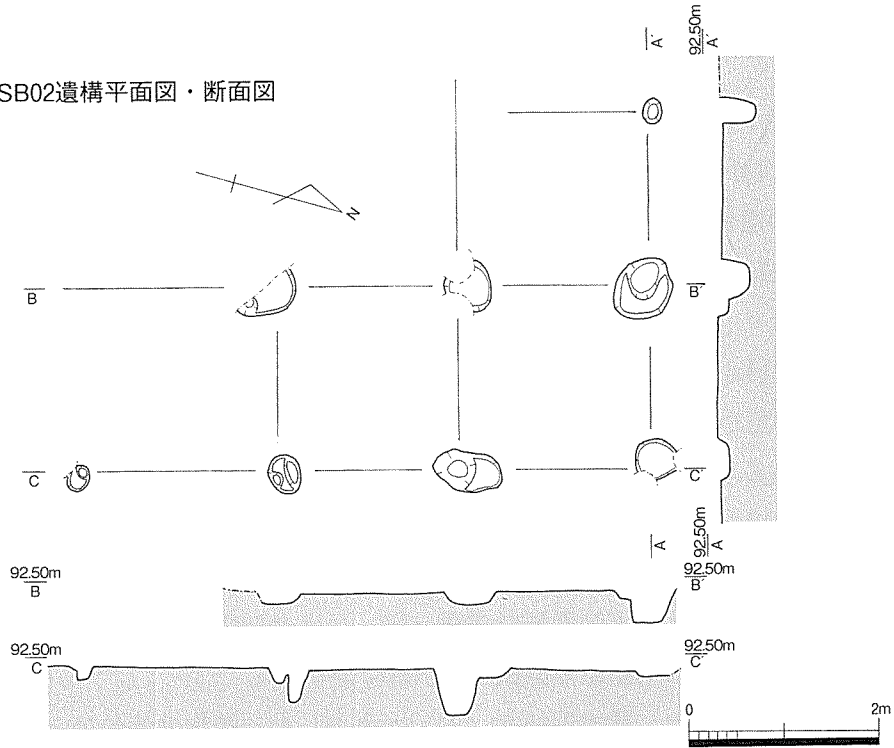
SE01からは土鍋口縁部片(11)が出土した。遺構の時期としては、土鍋の形態から概ね15世紀後半頃のものと考えられる。また、SD01に切られている点から、少なくとも16世紀前半以前に位置づけられる遺構であると考えられる。

土坑

SK01 (図6-13～17)

SK01からは、土師器皿(13)、灰釉陶器(14)、緑釉陶器(15)、須恵器壺口縁(16)、土師器小甕(17)等が出土している。各遺物については、土師器皿が10世紀後半～11世紀前半頃、灰釉陶器が10世紀後半～11世紀前半頃、緑釉陶器が10世紀後半頃に位置づけられると考

SB02遺構平面図・断面図



SD01・02・03土層断面図

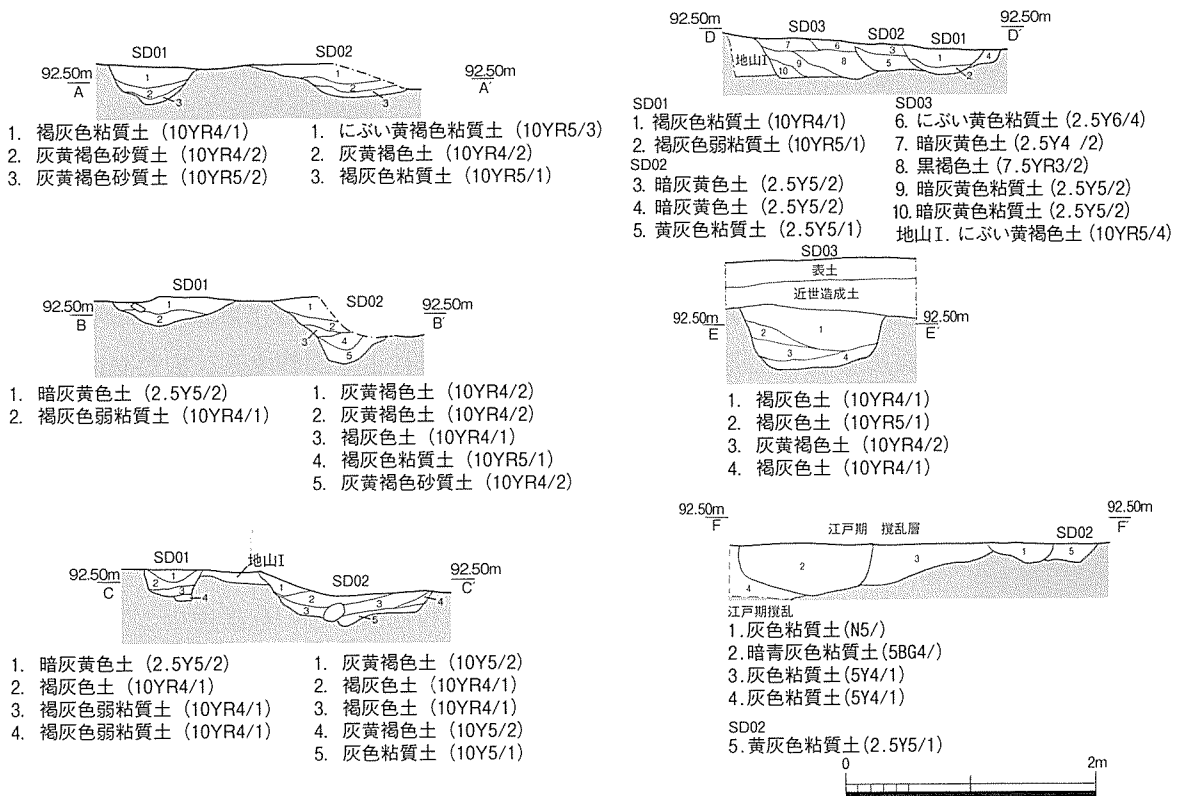


図 4

えられることから、遺構の時期については概ね10世紀後半～11世紀初頭頃に位置づけられると考えられる。

小穴群

P8 (図6-22) P8からは、越前焼播鉢(22)が出土した。遺物の年代としては、15世紀後半から16世紀前半頃に位置づけられるものと考えられる。

P11 (図6-19) P11からは、須恵器坏蓋(19)が出土した。遺物の年代としては、6世紀末頃と考えられる。

P14 (図6-21) P14からは、土師器甕口縁部(21)が出土した。

P15 (図6-24) P15からは、土器底部片(24)が出土した。遺物の年代としては、庄内式並行期頃と考えられる。

P17 (図6-25) P17からは、土器底部片(25)が出土した。遺物の年代としては、古墳時代前期、布留式期に相当するものと考えられる。

P25 (図6-18) P25からは、土師器坏口縁部(18)が出土した。

P27 (図6-26) P27からは、須恵器鉢後円部(26)が出土した。

P28 (図6-20) P28からは、須恵器坏身(20)が出土した。遺物の年代は、6世紀末頃と考えられる。

P30 (図6-27) P30からは、土師器甕口縁部(27)が出土した。

P31 (図5-6) P31からは、土師器高坏のものと考えられる口縁部片(6)が出土した。

P33 (図6-23) P33からは、土器底部片(23)が出土した。

遺構面採集資料 (図5-7、図7-28～30、33～36)

遺構検出面において採集した資料としては、土師器甕(7)、施釉陶器皿(28・29)、灰釉陶器皿(30)、埴輪片(33・34)、土錘(35)、砥石(36)、碗型滓(37)などが出土している。これらのうち施釉陶器皿2点については、瀬戸美濃産のものと考えられる。遺物の年代としては17世紀以降を考えているが、あるいは16世紀に遡るかもしれない。また、埴輪片2点については、33がタガ部分、34が円形のスカシを有する埴輪の胴部にあたる。33は、外面のタガ部分をナデ調整、内面については横ないし斜め方向のハケ目により調整する。また34は、埴輪の外面は縦方向のハケ目により調整し、内側には粘土の接合痕跡を留めており、明瞭な段差が観察される。情報は限定的であるが、概ね古墳時代後期前半頃の所産であると推定される。

IV 調査の成果

今回の調査においては、掘立柱建物2棟(SB01・02)、溝3条(SD01・02・03)、井戸1基(SE01)、土坑1基(SK01)、柵列2条(SA01・02)、小穴群などを検出した。これらのうち主要な遺構の時期は、古墳時代、奈良・平安時代、中世後期と大きく3時期に分かれており、当地における土地利用の変遷を窺い知るうえで、貴重な事例となった。以下、各時期

の特徴的な遺構について詳述する。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、SD03がある。出土遺物には庄内式並行期の高坏なども含まれるが、甕の口縁など、布留式の新段階に相当する遺物も多く含まれていることから、概ね古墳時代前期に属する遺構であると考えられる。他の遺構や後世の攪乱により大きく破壊を受けており、その全容は不明であるが、何らかの区画溝であったと考えられる。また、今回遺構としては確認できなかったが、古墳時代後期頃の埴輪片が遺構面において採集されていることから、後期古墳が近隣にあったものと考えられる。

奈良時代・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、SD02、SK01などがある。このうちSD02からは8世紀代の土師器皿とともに古代の瓦片が出土しており、近隣に寺院あるいは官衙に関係するような、瓦葺きの建物があつた可能性がある。遺構としての性格は不明であるが、「L」字状に屈曲することから、何らかの区画溝であったと考えられる。

またSK01については、「て」字状口縁を持つ土師器皿や灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、須恵器壺、土師器小甕等が出土しており、当地における10世紀後半～11世紀初頭頃にかけての時期の一括遺物として興味深い。

中世

中世段階の遺構としては、掘立柱建物SB01・SB02、柵列SA01・02、溝SD01、井戸SE01などがある。

これらのうちSB01、SA01・02、SD01の各遺構については、概ね16世紀後半頃に、その年代を位置づけられる。この各遺構は主軸方位がほぼ一致しており、その同時性は極めて高いと言える。また、この主軸は現在の街区とも概ね合致するため、西今町の街区の原型が、16世紀後半という時期にまで遡る可能性を示すものとして注目される。

この街区の形成時期という点に関しては、須川遺跡の東側に近接する西今遺跡1次の調査区においても同様の状況を示しており、15世紀後半～16世紀中頃の時期の掘立柱建物や溝については今回のSB01と同一の主軸方位を指向していた。この事例は、今回の調査によって得られた16世紀中頃～後半という時期が、西今町周辺の街区形成過程における画期となるという知見を、補足するものとして評価することができるだろう。

今回の調査地となった須川遺跡が立地する西今町という土地は、近世には「朝鮮人街道」、中世にあつては「下街道」の名で呼ばれた街道が南北に縦貫する土地でもある。今回の調査成果は、この街道沿いの町において、16世紀頃に何らかの要因によって、街区の再編が行われたことを窺わせるものとして、非常に興味深いものとなった。

この地域では、近年、開発事業が増加する傾向にあり、次々と新たな知見が付け加えられていっている。しかし、未だ地域の歴史の全容を論じるには資料が不足している状況であり、今後の調査事例の増加が期待される。

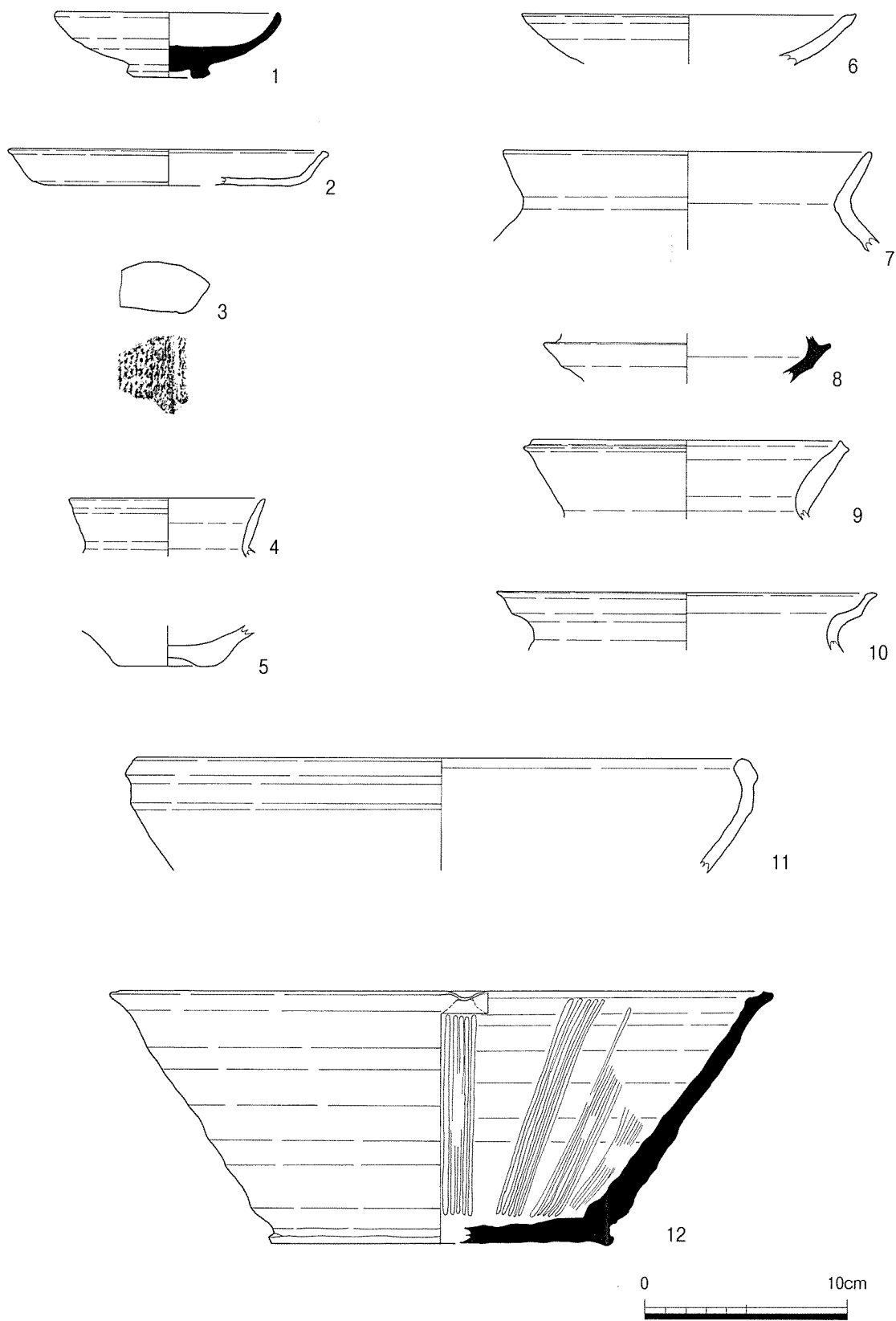


图 5

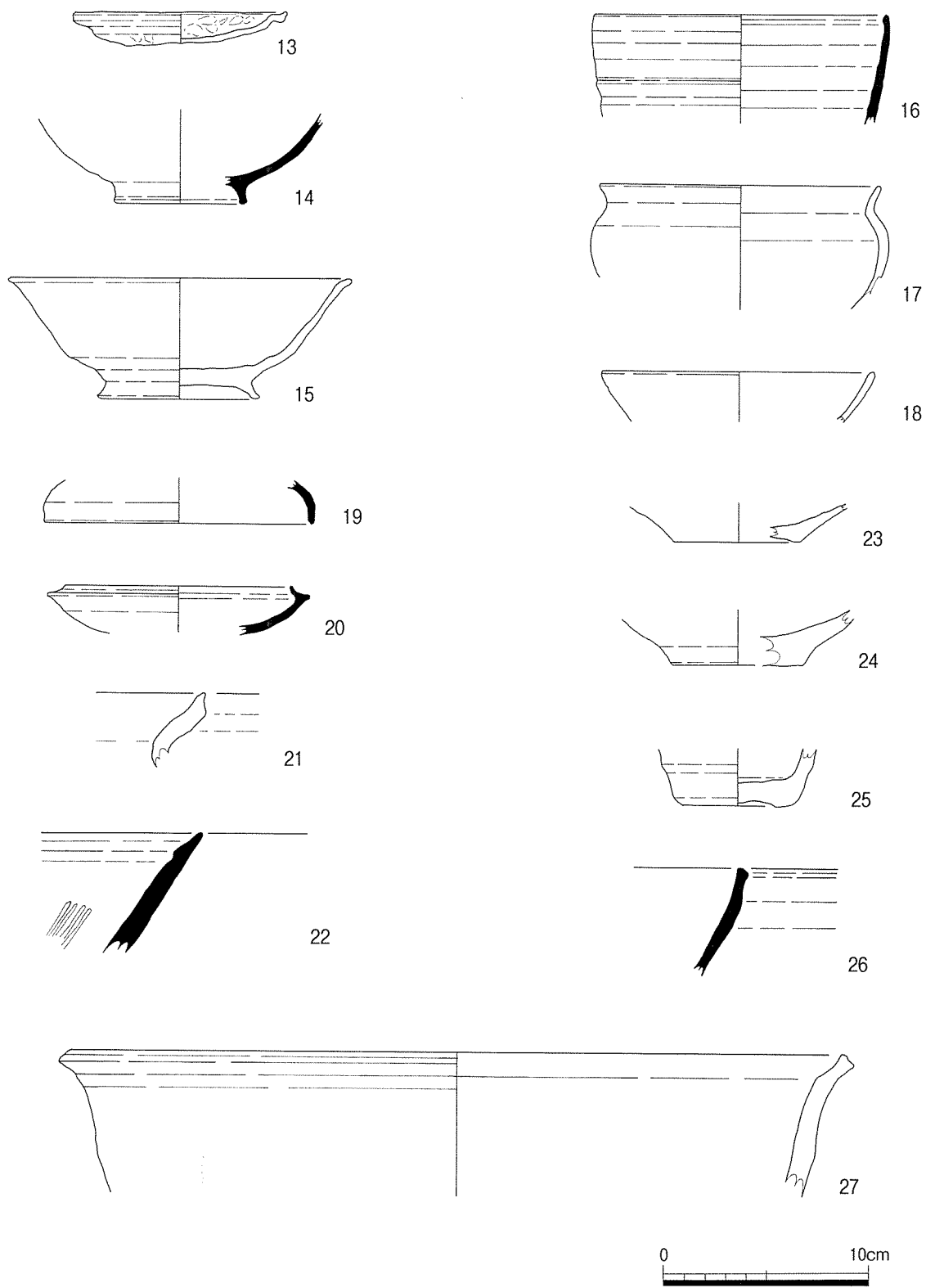


图 6

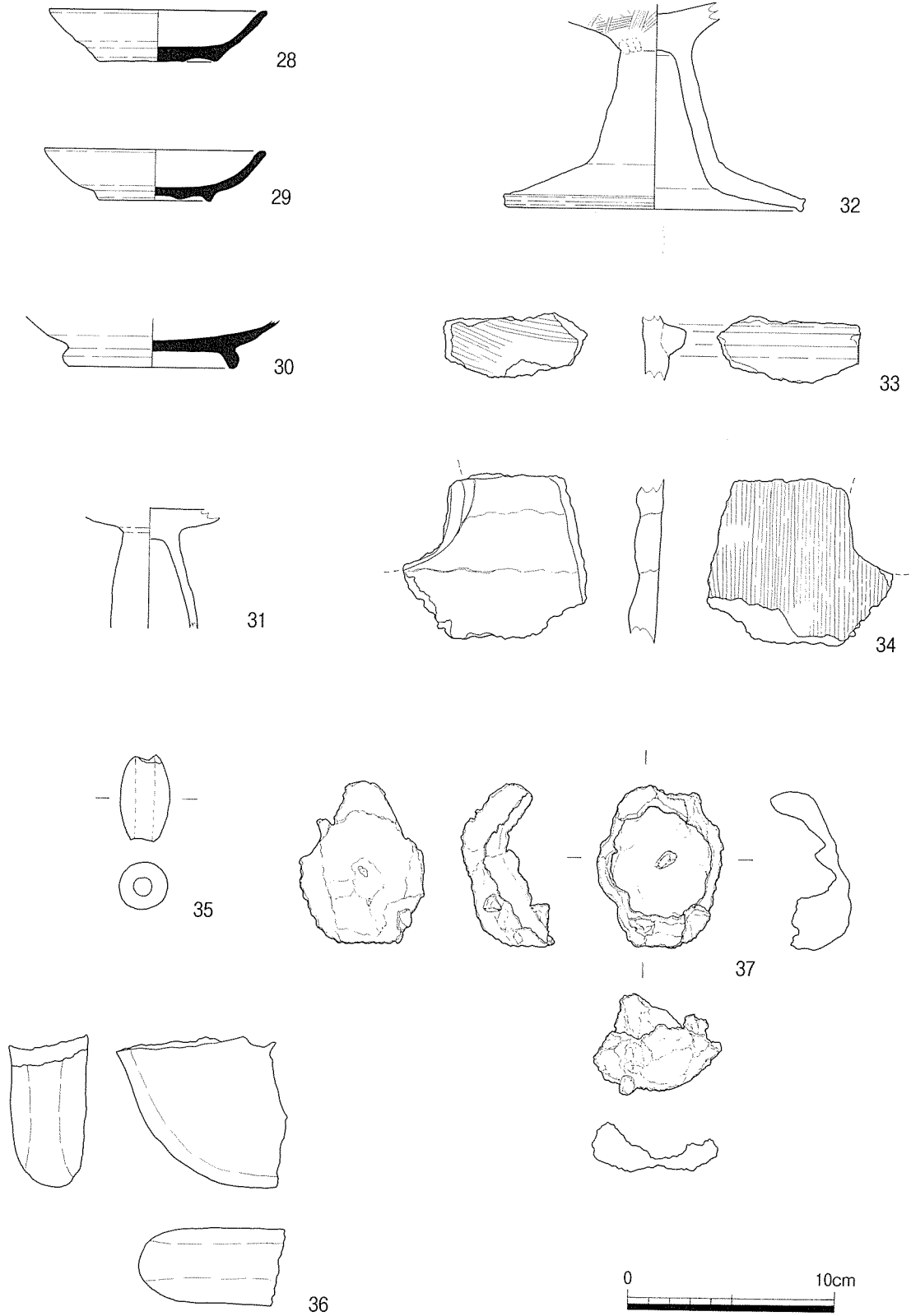
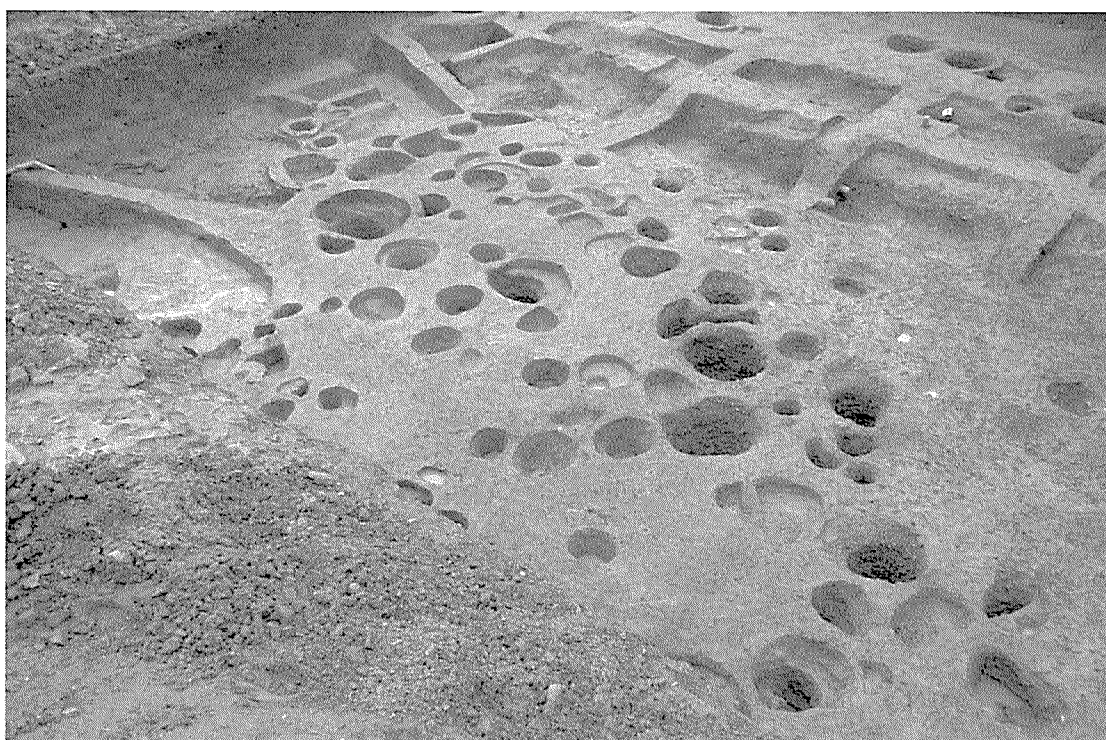


图 7



1 調査区全景（南から）



2 掘立柱建物 SB01・02全景（南から）



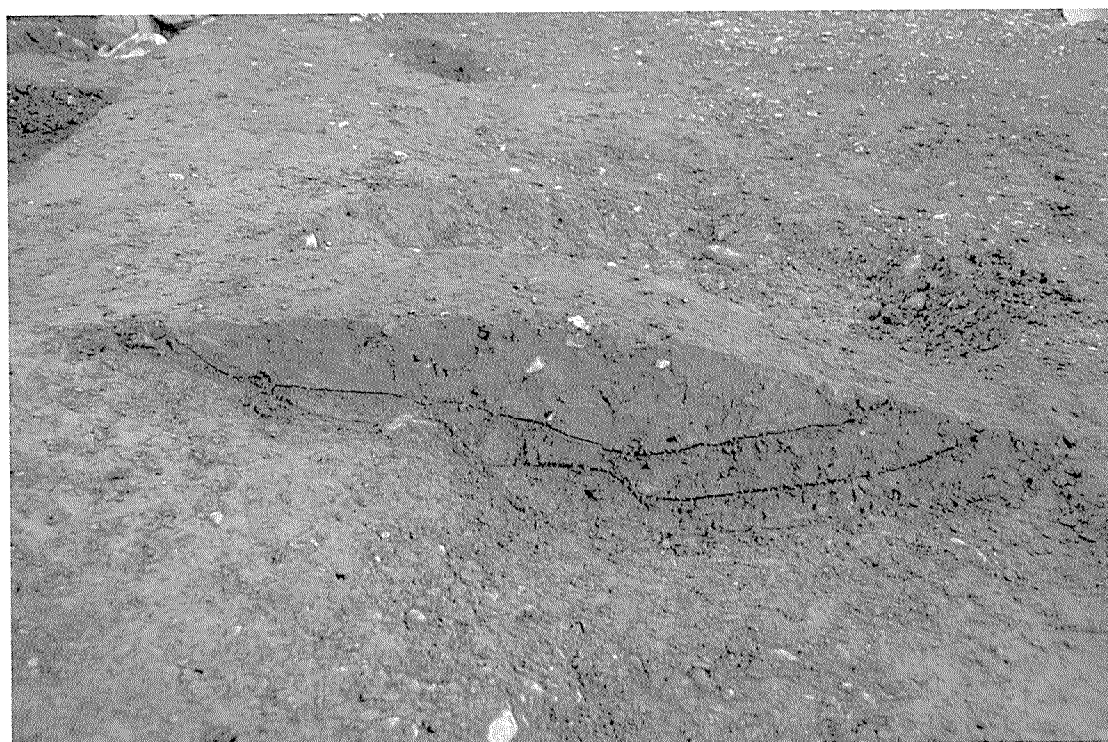
1 井戸 SE01完掘状況 (南から)



2 土坑 SK01完掘・遺物出土状況 (西から)



1 溝 SD01土層断面 B-B' (北西から)



2 溝 SD02土層断面 B-B' (北西から)



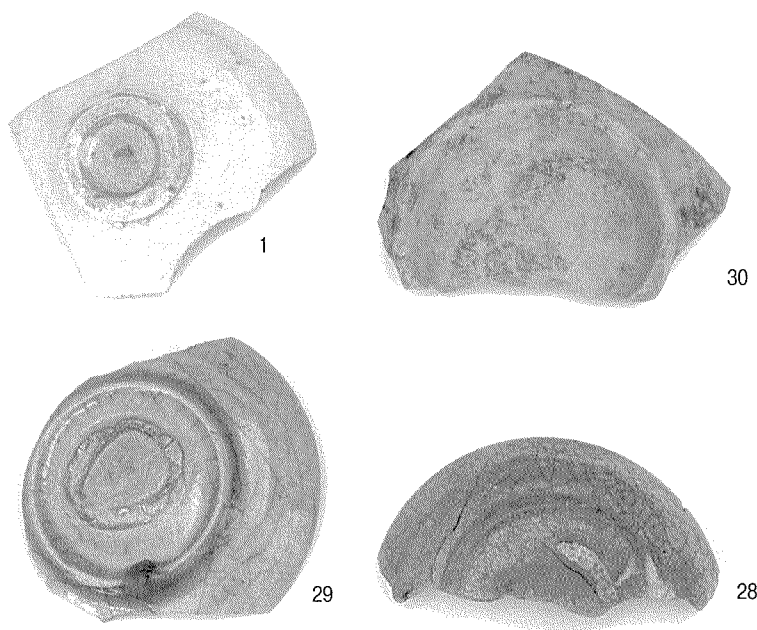
1 溝 SD03土層断面 E-E' (南西から)



2 溝 SD01・02・03土層断面 D-D' (南西から)

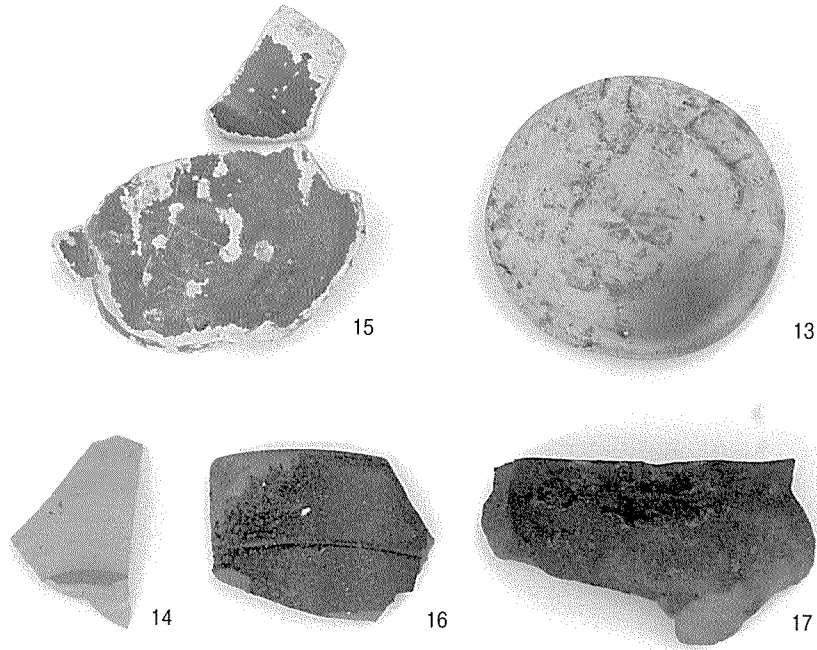


1 出土遺物

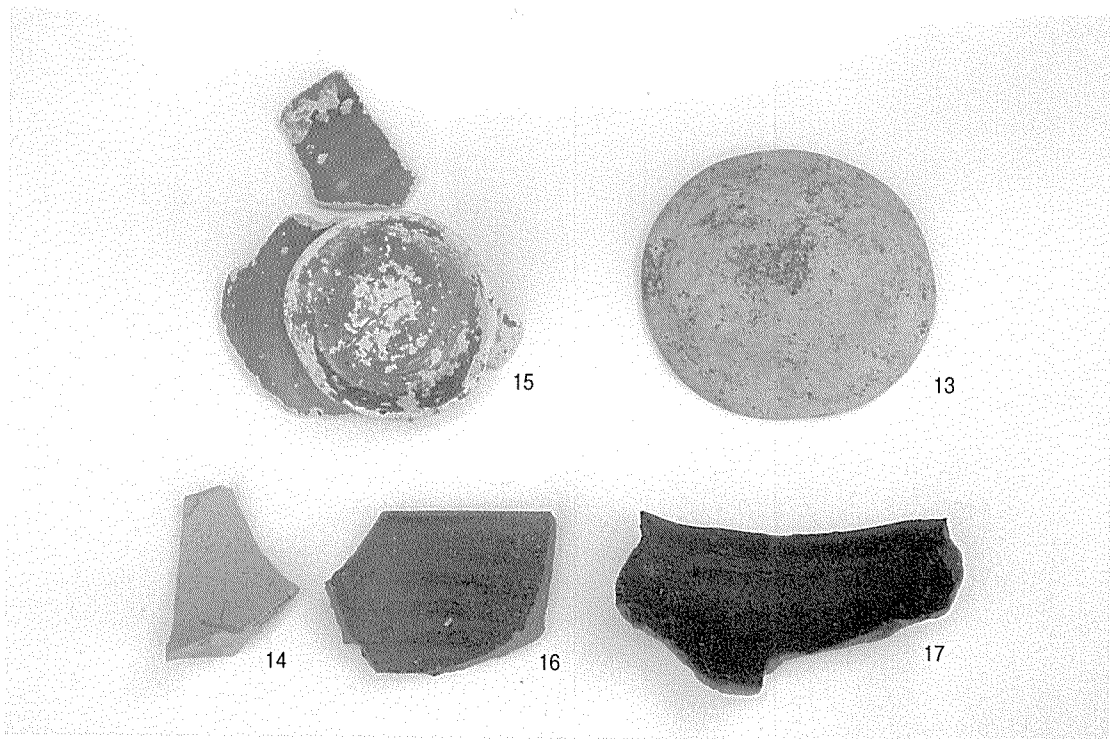


2 出土遺物

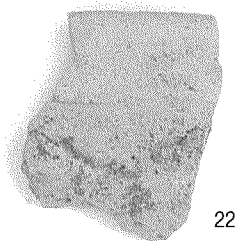
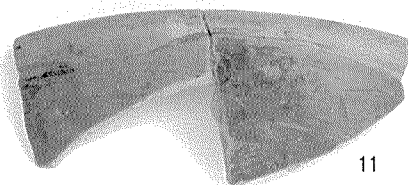
図版
6



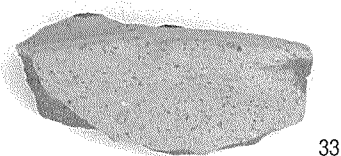
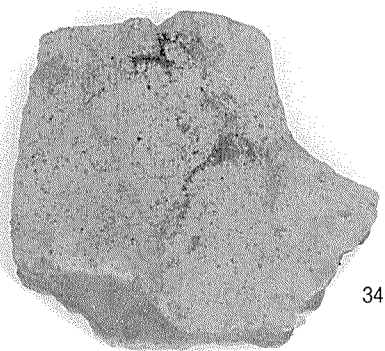
1 出土遺物



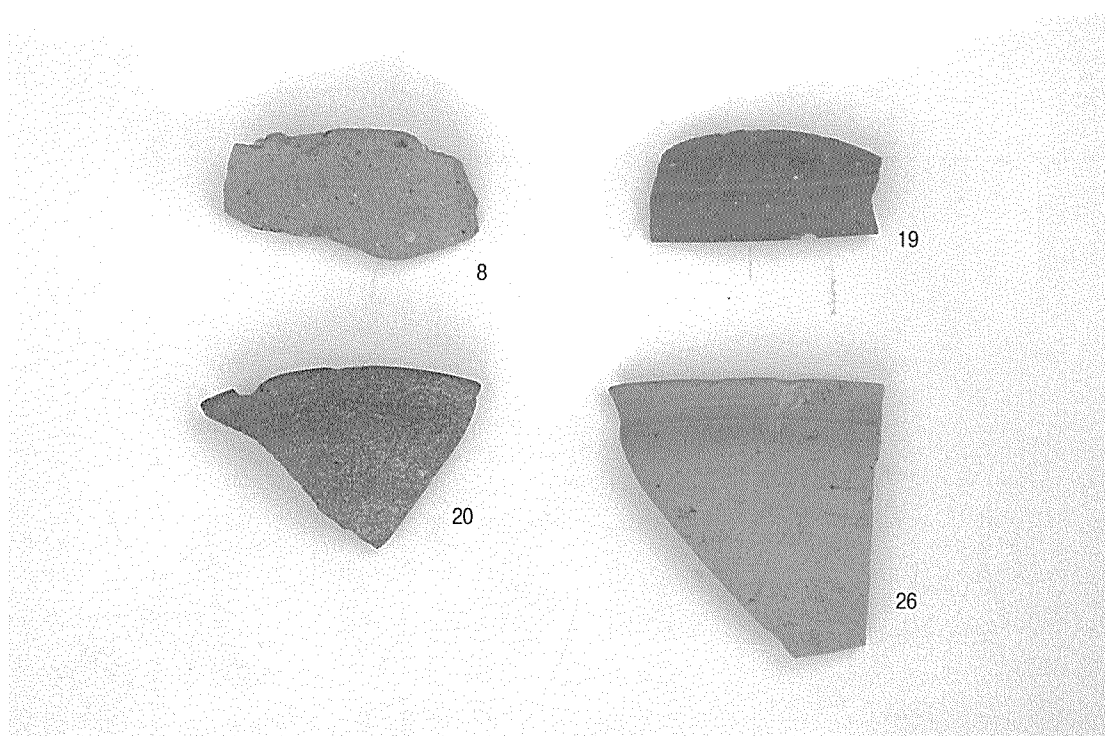
2 出土遺物



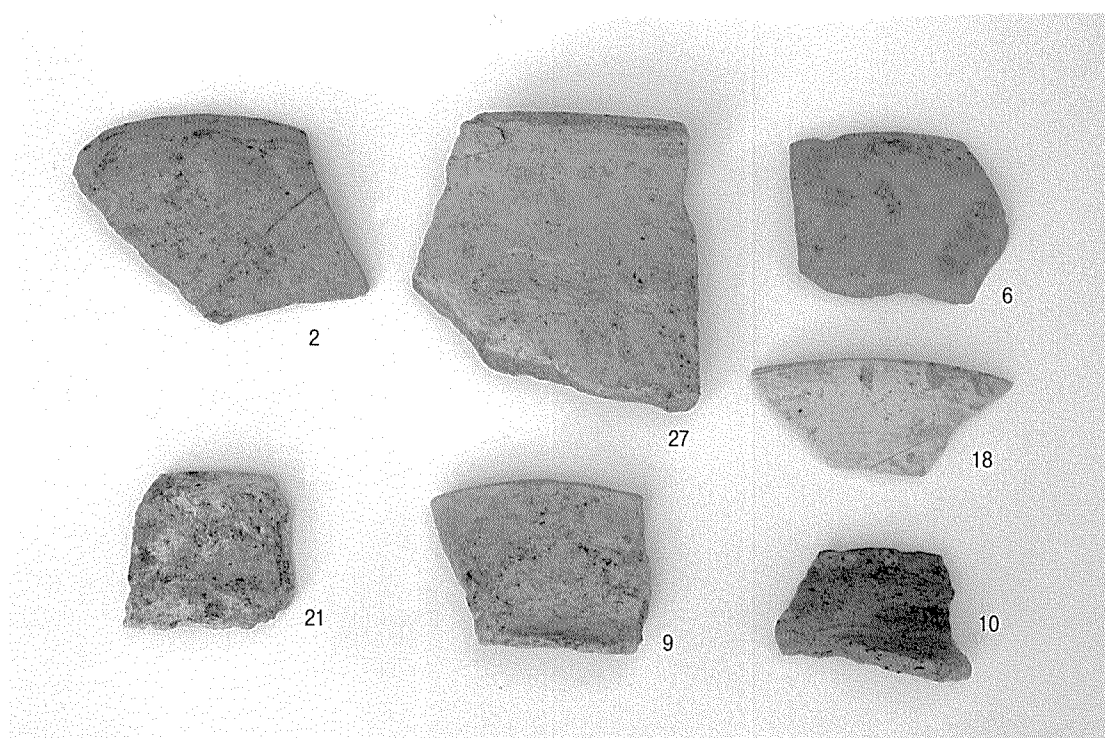
1 出土遺物



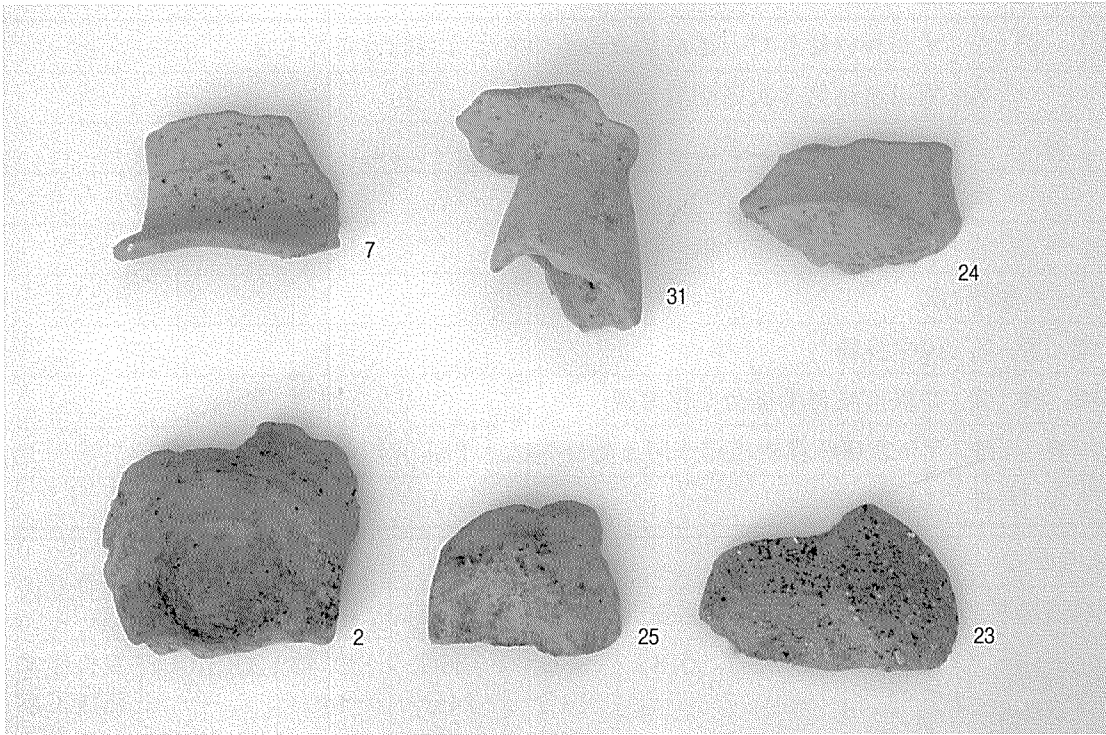
2 出土遺物



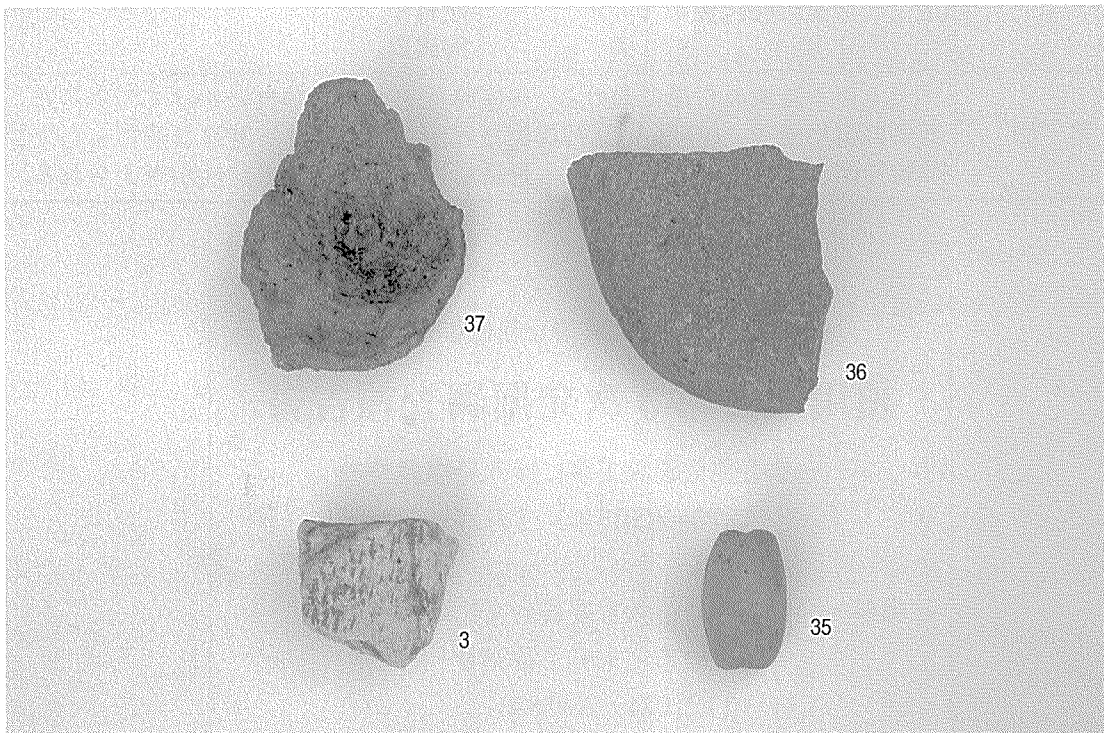
1 出土遺物



2 出土遺物



1 出土遺物



2 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すがわいせきだいさんじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	須川遺跡第3次発掘調査報告書							
副書名	集合住宅建設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	60							
編著者名	田中良輔							
編集機関	彦根市教育委員会文化財課							
所在地	〒522-000 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20150327							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
すがわいせき 須川遺跡	ひこねし 彦根市 にしいまちよう 西今町	25202	018	35度 14分 48秒	136度 14分 12秒	130.42 ㎡	20131011 ～ 20131122	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
須川遺跡	集落	古墳時代前期 平安時代後期 室町時代後期	掘立柱建物 土坑 井戸 溝	須恵器 土師器 埴輪片 陶磁器	平安時代末頃から中世にかけての集落跡。			
要約	犬上川下流域の右岸における、平安時代末頃から中世にかけての集落跡。数条の溝や柵列、井戸、掘立柱建物などが確認された。特殊な遺物として、埴輪片が出土していることから、近隣に古墳があった可能性が考えられる。							

彦根市埋蔵文化財調査報告書第60集

須川遺跡第3次発掘調査報告書

—集合住宅建設工事に伴う発掘調査—

平成27年（2015年）3月27日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜県岐阜市七軒町15番地

TEL 058-263-4101

SUGAWA SITE

2015

